

ゆとり世代の芽吹き

■2人の若者

8月27日、3年ぶりに実施されたにかほ市総合防災訓練で防災士 斉藤亜希さん（にかほ市出身）と東日本大震災の語り部 菊池のどかさん（釜石市出身）の2人の若者によるオンライン対談が行われました。

彼女たちが現在の活動に取り組むきっかけになったのは東日本大震災です。震災当時中学二年生だった2人は、自らの体験と経験から「震災を風化させてはいけない」、「人々の防災意識を高めていかなければならない」という強い意思をもって防災の啓発活動に取り組みはじめました。彼女たちと接してみても感心するのは、この公益性の高い活動を、誰かがではなく、自分たちがやるものとして自然体で捉えているところです。

■最近の若い人たち

以前のコラムでも書きましたが、近年、社会課題をビジネスで解決しようという若者たちが増えています。20代で起業する人も多く、中には学生時代から会社をおこす若者も目立っています。また起業ではなく、NPO法人に加わるなどしてボランティア活動に積極的に参加する若者も増えています。

近頃の私の疑問に、「なぜ多くの若者が社会的課題を強く意識するのか？」があります。思ったのは、これほど多くの若者に同じ価値観を抱かせるには集団に對する働きかけがあったはずだということです。そこで私はこの年代の若者たち

の教育環境に着目してみました。するとある言葉が見えてきました。それは「ゆとり教育」でした。

■「ゆとり教育」とは？

ゆとり教育とは、2002年から小・中学校の義務教育を中心に採用された教育方針で、それまでの教育が子どもたちからゆとりを奪っているとして、授業時間を大幅に削減することで詰め込み教育からの脱却を図ろうとしたものです。ゆとり教育が目指したのは、激変する社会を生き抜く力、いわゆる「生きる力」を育むことでした。

一方、ゆとり教育により教科学習の時間が大幅に削減されたことで、学習内容も大きく削られてきました。例えば円周率は30代以上の人は円周率は3・14が当然です。ですが、ゆとり教育では円周率は3と教えられました。ゆとり教育が学力低下を招くと批判されたのはこういう理由によります。結局、この心配は払拭されず、ゆとり教育は10年で幕を下ろすことになりました。ちなみに「ゆとり世代」とはこの期間に教育を受けた若者たちの総称です。

他方で、ゆとり教育の中で新たに取入れられた授業もありました。それは「総合的な学習の時間」です。この総合的な学習の時間の目的は「自分で考え行動する力」を養うことにありました。農業体験や地域の人との交流、あるいはボランティア活動への参加などを通じて自ら考え行動することを身に付けさせよ

うとするものです。また、進路指導においても単に進学先を選択させるだけでなく、キャリア教育を充実させることによって、将来どのような生き方をしたいのかを考えさせる教育が進められました。

■ゆとり教育に対する評価

ゆとり世代はボランティア活動に積極的だと言われています。もう皆さんもわかりただいていいると思います。それは今も残る総合的な学習の時間で、課外活動に触れる機会がたくさんあり、その取組みに興味を持つ子どもたちが増えたからです。

ゆとり教育に対する評価はまだ定まっていません。どちらかといえば否定的な声の方が多数です。ですが、現在のSNSによる情報発信や事業創出などの新たな社会的文化をつくり出しているのは彼らゆとり世代です。前述の2人の若者もゆとり教育の中で自分というものを確立してきたわけです。現在、市内でもゆとり世代とその周辺世代の若者たちが、他の世代も巻き込みながら新たな潮流を生み出しています。国家百年の大計として進められたゆとり教育の成果がいま着実に芽吹いてきていると私は感じています。



にかほ市長
市川雄次

創造を

想像する

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。

